国宝　長谷川等伯「楓図壁貼付」（部分）※全図は52-53頁参照

国宝　狩野永徳「檜図屏風」（部分）※全図は50頁参照

熾烈なバトル!! 等伯 v.s. 永徳

桃山文化の覇者はどちらだ

［対談］山本兼一（小説家）＋ 山本英男（京都国立博物館学芸部美術室長）

三代続く絵師の家に生まれ、狩野派を率いて活躍した狩野永徳と、能登から上洛して一代で絵師として上り詰めた等伯という、いずれも桃山を代表する二人の絵師。永徳が等伯の仕事をつぶしたり、等伯も永徳を譏（そし）ったりと、熾烈なバトルも繰り広げられたという。ここでは現在、「別冊文芸春秋」にて永徳を主人公とした小説「花鳥の夢」を連載中の小説家・山本兼一氏と、二〇〇七年に行われた狩野永徳展、そして今年の長谷川等伯展を担当している山本英男氏（京都国立博物館学芸部美術室長）に二人の絵師について語っていただいた。

右：重要文化財　長谷川等伯「三十番神図」永禄9年（1566）絹本著色　1幅
94.5×39.1cm　大法寺蔵（高岡市）　上：同部分

武家から染物屋に養子へ、絵仏師として七尾で腕を上げる

――まずは山本英男さんに等伯がどういった人物なのか、教えていただけたらと思います。

室長　出身はいまの石川県の七尾です。天文八年（一五三九）に、奥村家という七尾の地を治めていた畠山氏の家臣の家に生まれ、幼くして染物屋の長谷川家に養子に入ったといわれています。近年、七尾の奥村家の菩提寺である本延寺からこれを裏付けるような資料も出てきました。

山本　染物屋から絵仏師になったということですから、家業の染物の仕事もかなりしていたのでしょうか。

室長　下絵などをいろいろ描いていたと思います。そしてそれが高じるかたちで、おそらく絵仏師の修業も早い頃からやっていたのではないでしょうか。最近は養祖父の法淳も、養父の宗清も絵を描いていたと考えられるようになっています。おそらく、等伯も宗清から絵仏師としての方向性を幼い頃から定められていただろうと思います。二十代であれだけの仏画を描いていますから、十歳ぐらいにはそこそこの絵の修業はやっていたでしょう。

とくに生家の奥村家、養子先の長谷川家、ともに日蓮宗の熱烈な信徒だったので、それに関係する仏画類を頻繁に描いています。それから、本延寺に日蓮聖人の木彫がありますが、その彩色を行ったことが知られています。残念なことに、その上に後世、色が塗られてしまいまして、それでわからなくなっていたのですが、中に書かれた「彩色者　長谷川又四郎信春」という墨書が発見され、等伯が彩色したのは間違いないといわれています。その頃、彼は等伯ではなく、信春（のぶはる）という名前で活動していました。

山本　染物屋でどのような染物をしていたのかは、推測がつくものですか。

室長　全くわからないです。長谷川等伯の子孫のお宅にある系譜などにも、染物屋を家業としているとしか出てきません。

山本　昔の染物の図案を見ていると、花鳥を大胆にデザインしたものがよく見受けられますが、養家の染物修業が、後の等伯の絵画制作に何か影響を与えたのでしょうか。

室長　平面的で色彩感豊かな装飾という意味では、おそらくその影響も受けているはずです。また、高岡市の大法寺にある「三十番神図」には、神々それぞれの背に屏風が描かれています。そこに画中画があり、楓や、鹿などの動物、そして牧谿猿も描いてあったりします。

山本　牧谿の絵もあるのですか？

室長　牧谿ふうのものが小さく描いてあったりしますので、すでにその時点でいろいろな古画に触れていたのだと思います。大和絵などもその頃から勉強していることがわかります。

――「三十番神図」はかなり若い頃ですよね。

室長　二十八歳頃の作品です。

現在確認されている最も制作時期の早い作品の一つで、二十六歳の時に描いた羽咋（はくい）市の正覚院にある「十二天図像」（18頁参照）の台座には牧谿スタイルの龍虎が描かれています。なかなか手慣れています。

能登から京都へ発つ

山本　能登の七尾から京都に出てきたのはいつ頃のことでしょうか。

室長　三十三歳ぐらいではないかといわれています。本延寺は京都の本法寺の末寺に当たる関係で、その伝（つて）で上京し、まずは本法寺を頼ったというのが、いまのところ一般的な説です。

――その後、京都で等伯が住んだ場所と、狩野家とは近かったのですか。

室長　狩野家は狩野図子（ずし）で、いまでいうと、烏丸今出川の交差点から西に三百メートルぐらい行ったところです。狩野元信邸宅跡を示す小さな石碑が立っています。

山本　堀川寄りですよね。小川通りから元誓願寺通りのあたりで、いまでもそれらしい路地があります。

おそらく、本家の周りには弟子や出入りの人たちの家があったのでしょう。あそこに立つと、当時の様が彷彿としてきます。

室長　そうですね。狩野図子といわれるからには、たいへん立派な屋敷を構えていたのでしょう。

山本　それこそ永徳が描いた「洛中洛外図」にあるような板葺きの石を載せた平屋の家が、いかにもあのあたりにあったような気がします。

室長　一方、等伯の住まいは『仲家本長谷川家系譜』によると三条衣棚、『七尾町旧記』では三条街子頓図子という二つの記載があり、どちらかに特定することはできません。

等伯、狩野派に弟子入り？

山本　狩野永納の『本朝画史』には京都に来た等伯が狩野派に弟子入りしたという記載があります。

室長　これは研究者によって意見は様々ですが、私は実際に弟子入りしたと思っています。

山本　弟子入り先が本家筋なのか分

【やまもと・ひでお】
1957年倉敷市生まれ。大阪大学卒。山口県立美術館学芸員を経て、現在、京都国立博物館学芸部美術室長。主要著書に『雲谷等顔とその一派』（日本の美術323）、『室町時代の狩野派』（京都国立博物館編）『仁和寺大観』・『雪舟とやまと絵屏風』・『禅と天神』（共著）等がある。

家筋かはわからないですね。その当時から狩野家にはけっこう分家があります。

室長　いろいろ分かれています。ただ、画伝書を見ていくと、元信の三男松栄に学んだ、あるいは永徳に学んだという説があります。それからもう一つ重要なのは、長谷川派の系譜にも狩野派に学んだと書かれている点です。

山本　そうすると、かなり確実性は高いですね。

室長　はい。面白いのは、長谷川派の系譜に狩野祐雪宗信に学んだと書かれていることです。祐雪は、元信の長男で、三男の松栄やその息子の永徳と比べると存在がちょっと薄いのですが、調べていくと、元信の在世中に家督を相続し、元信が亡くなってからほどなく死んだ可能性が高いのです。松栄が大徳寺に「大涅槃図」を寄進するのが永禄六年（一五六三）で、祐雪はその前年に亡くなったという記録が画伝類に出てきます。そうすると、永禄五年に死んだことになり、永禄五年だと等伯が京都に移住する前の話になります。ですから、狩野派に入門したのは割と早い時期になり、移住する前から何度か京都に来ていて、狩野派の世話になっていた可能性も出てきます。

江戸時代の資料には、日蓮宗の妙覚寺に信春筆という絵馬があって、その制作年代は永禄四年（一五六一）と元亀元年（一五七〇）です。妙覚寺は狩野家の菩提寺ですから、そういうことも絡め合わせると、移住以前から京都に何度も来ていて、支持者を持っていた可能性はあります。残念ながら、この絵馬は天明の大火で焼失しました。また、作品の上でもいくつか狩野派を勉強して描いたと思われるものがあります。

――実は等伯の養祖父も京都に来ていたという記述がありますね。

室長　『等伯画説』の中に、養祖父が京都の七条道場（時宗の金光寺）で能阿弥の絵を見たという記録があり、京都に来ていたことが確認できます。

山本　昔から職人たちは、私たちがいま想像するよりも頻繁に移住をしていたようです。刀鍛冶の話を調べていますと、刀鍛冶はチームで移住します。たとえば、奈良の人たちが美濃に工房ごと移住し、火床（ほど）を掘って、鞴（ふいご）を据えて鍛冶場を作り仕事をする。そんなことがあちこちであります。いまのわれわれの想像では、昔は固定した場所で仕事をしていたと思いがちですけれども、そうではないですね。

室長　そうですね。永徳も信長の安土城の時には、安土へと移っていますからね。

等伯、空白の十七年

――いずれにしても、等伯は三十代で京都に出てから、その後かなり長い期間、消息がつかめません。

室長　そうなのです。十七年間の空白があります。

山本　三十代、四十代がほぼ全部空白。これは下積み時代なのでしょうか。

室長　本法寺に「日堯上人像」を残すのが三十四歳、元亀三年（一五七二）のことです。それ以降、大徳寺の三門に壁画を描く天正十七年（一五八九）までの期間がごっそりと抜けます。そのあいだに狩野派との関わりももっただろうという説は前々からありましたし、もう一つ、堺に行っていたのではないかという説もあります。

『等伯画説』から利休の名前は消されたのか

山本　堺ということは、もしかしたらそこで利休との関係ができたのでしょうか。

室長　等伯と昵懇（じっこん）だった本法寺の日通上人がまとめた『等伯画説』には

【やまもと・けんいち】
1956年京都府生まれの作家。2002年『白鷹伝　戦国秘録』でデビュー。04年『火天の城』で第11回松本清張賞、2009年『利休にたずねよ』で第140回直木賞受賞。現在「別冊文藝春秋」にて「花鳥の夢」を好評連載中。

津田宗及やへの松良心、茜屋宗佐といった同時代の堺の茶人の名前が出てきますから、なんらかの交流をもっていたのではないかと思われます。向こうに住んでいたことを立証するほどのものはないのですが、少なくとも行き来はしていたでしょう。

山本　そういう会合衆（えごうしゅう）がいると、絵描きは広い屋敷に招かれて、どこか一室なり離れなりを半年ぐらいゆっくり絵を描きながら滞在させてもらって、今度は何を描きましょうか、今度は鳥の絵がいいなとか、こっちの座敷には山水がいいなとか話しながら、また描いて（笑）。そういうものがイメージされます。

室長　おっしゃるとおりです。やはり食べていかなければなりませんから、当時羽振りのよかった堺に流れていくのもよくわかります。それから、のちに等伯が深く帰依する日通上人は堺の油屋一族といわれていますので、そこからも堺との関係が深まっていったのでしょう。

――『等伯画説』の中にはたしか利休は出てきませんね。

室長　はい。『等伯画説』は日通上人がまとめたものですが、おそらく

重要文化財　長谷川等伯「日堯上人像」元亀3年（1572）絹本著色　1幅　97.5×49.0cm 本法寺蔵